

表 3 形成的評価の定義における概念の拡張

学習過程についての情報 (スクリヴァン)			
学習過程についての情報 (ブルームら)	教師が授業についての決定に使えるもの		
学習過程についての情報 (サドラー)	教師が授業についての決定に使えるもの	生徒が自身のパフォーマンスの改善に使えるもの	
学習過程についての情報 (ブラックとウィリアムなど)	教師が授業についての決定に使えるもの	生徒が自身のパフォーマンスの改善に使えるもの	生徒を動機づけるもの

出典：S. M. Brookhart, “Expanding Views about Formative Classroom Assessment: A Review of the Literature,” in J. H. McMillan ed., *Formative Classroom Assessment: Theory into Practice*, New York: Teachers College Press, 2007, p.44.

出典：石井英真『現代アメリカにおける学力形成論の展開 増補版』東信堂、2015年、p.323より

この「形成的アセスメント」の核心は何かという点ですが、それは「フィードバックのあり方」つまり〈評価結果の伝え方〉をどうするのかという点にあると思います(11)。すなわち、子どもたちがつまづいた場合、一方的に正誤の結果や点数のみを返すのではなく、学習者の経験と状況を踏まえて、学習者が理解でき学習改善となる手がかりを与えることが重要であることが明確にされたのです。この点について、形成的アセスメントに関する翻訳書では、次のようにまとめられています。なお、著者であるシャーリー・クラークは、ブラック (Black, P. B.) とウィリアム (William, D.) が所属する ARG (Assessment Reform Group) に所属する実践家として知られています。

「(ブルームの) 形成的評価は、教師主導という色彩が強いが、形成的アセスメントは、子どもの学びを教師だけでなく子ども自身にも評価させるという違いがあると言えよう」(シャーリー・クラーク著、安藤輝次訳『アクティブラーニングのための学習評価法—形成的アセスメントの実践的方法—』関西大学出版部、2016年、p.220)

「形成的評価」のポイントとして、先に述べました「内容妥当性」ととともに「フィードバックのあり方」の二点があるように思います。ぜひ、授業実践で確かめていただきたいと思います。

## (2) 「真正の評価」論の展開

もうひとつの教育評価研究の新しいステージとして、「真正の評価 (authentic assessment)」論の展開があります。先ほどお話ししたように、アメリカにおいても国家規模の学力向上政策とトップダウン式の強力なテスト政策を批判するなかで、**ニューマン (Newmann, F. M.)** 1988年や**ウィギンズ (Wiggins, G.)** 1989年が提唱したものです(12)。皆さんもご存じの「ポートフォリオ評価法」や『パフォーマンス評価法』の基礎理論であります。

その特徴について、アランが表4のようにわかりやすくまとめてくれています。この表について、二点ばかりコメントしておきます。まず、一つ目は、教育評価を改革するには、評価の方法を新しくするだけでなく、『カリキュラム』や「授業」のあり方も同時に改革しなくてはならないという点です。これは、先に述べましたタイラー原理ですね。もうひとつは、私の意見では「真正の学力モデル」と「従来の学力モデル」を二項対立として捉え、相反するものと理解しなくて良いのではないのでしょうか。むしろ、「真正の学力モデル」に「従来の学力モデル」が包含されていると理解しても良いのではと思います。

表4 「真正の学力モデル」と「従来の学力モデル」

局面	真正の学力モデル	従来の学力モデル
問題	オープン・エンドで、複雑で、状況的で、リアルな生活を写し出す問題に焦点化されている。	単一の答を持つ問題、状況を無視した単純な質問、不自然で、リアルでない問題が強調される。
教材	あくまでも一次資料を強調し、「深さ」を提供する多面的な教材を使用する。	二次資料に依拠しつつ、単純で表面的なテキストを使用する。
カリキュラム	主要な概念、有効な方略を強調し、「深さ」を提供するカリキュラムである。	事実や公式のみを強調するカリキュラムである。
教育評価	知識を保持していることを実演すること（デモンストレーション）を強調する、真正のパフォーマンスを通して学力を評価する。	記憶したことや理解したことへの的を絞った短答式のテストを使う。
授業	高次の思考スキルを強調したり、足場（scaffolding）を提供したり、メタ認知を容易にしたり、グループ討論を使ったり、徹底した学習に価値を置くなど、さまざまな授業へのアプローチを要求する。	伝統的な授業モデルであって、先生が説明して、生徒は聞き、低次の思考スキルを強調し、先生の指示に従わせ、メタ認知に関心がなく、討論するよりも時間つぶしの勉強をさせ、網羅的な学習に価値を置く。

出典：Allan A. Glatthorn (1999), *Performance Standards and Authentic Learning*. Eye on Education, p. 26

私は、「真正の評価」論について、質と参加を基軸とする「真正の評価」論と考え、次の六点としてまとめています。

- i 評価の文脈が「真正性」を持っていること。

- ii 構成主義的な学習観を前提としていること。
- iii 評価は学習の結果だけでなくプロセスを重視する
- iv 学習した成果を評価する方法を開発し、さらには子どもたちも評価方法の選択ができること。
- v 評価は自己評価を促すものでなくてはならない。
- vi 評価は教師と子どもとの、さらには保護者や地域住民も含む参加と共同の作業であること。

(参考文献:拙著『教育評価』岩波書店、2009年、pp.71-78)

そして、最近では、質と参加を基軸とする「真正の評価」を次のように考えています。「子どもたちの「学び」の実相を深く診断するものであるとともに、それ自体が「学び」を活性化させる指導方法の一環となる。子どもたちは、その評価方法に**参加**するなかで、自らの「学び」を自己評価するとともに、より深く**質的に多層的な理解を得ることができるようになる。**

すなわち、評価を子どもたちの学力を把握する単なる手段と見るのではなく、評価行為自体を子どもたちの自律・自治を促す営為と見る評価観こそ、「真正の評価」論の立場である。「評価が変わる、学びが変わる」とは、単に「評価のために学ぶ」のではなく、評価行為自体に子どもたちの自律・自治の契機をみようとす意味であり、今後の評価実践の指針を示しているといえよう。」(13)

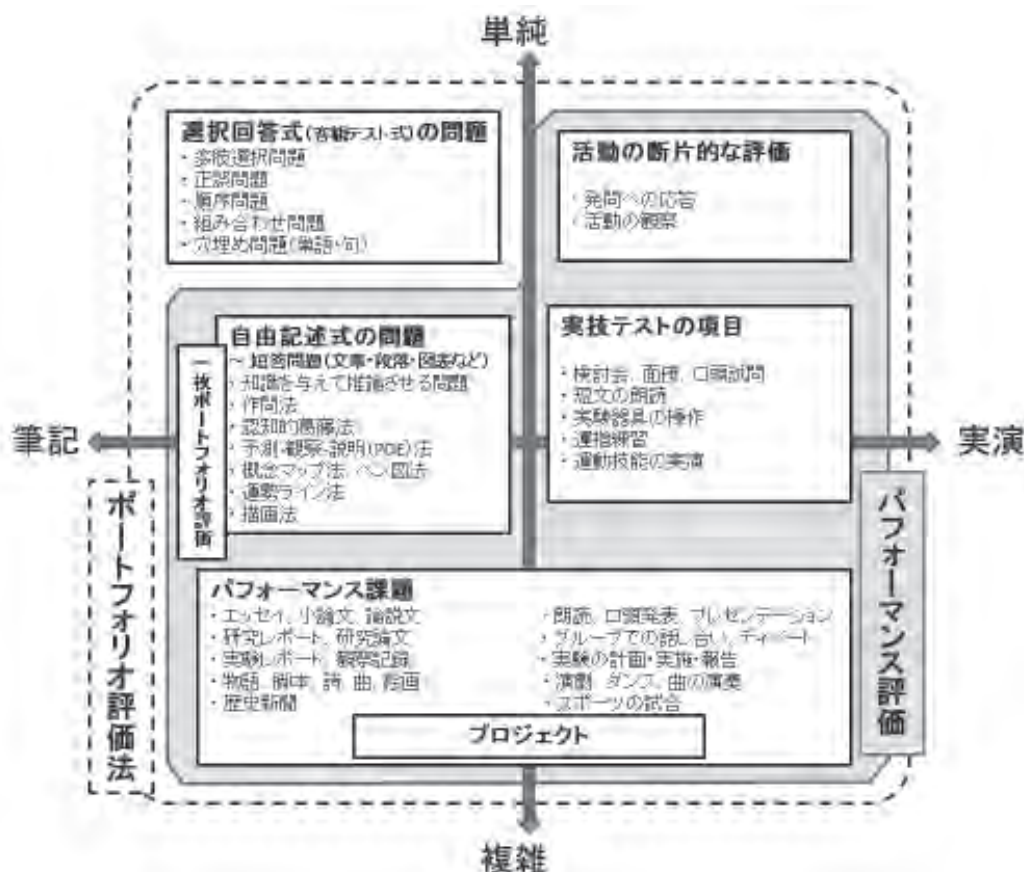
次に、**カリキュラム適合性**（妥当性 or 真実性）と多様な評価方法の開発についてお話しします。つまり、形成しようとする学力の質に適合する評価方法の開発を行うという点です。図4で、京都大学の西岡先生がうまく図示しています。

この学力の質と評価方法の適合という場合に、よくミスマッチが起こります。探究を促す、優れた授業を実践しても、「知識・技能」を再生するのみのペーパーテスト・客観テストに依存するだけでは、探究型の授業展開によって生徒にどの程度「思考力・判断力・表現力」が形成されたのかを確かめることができません。生徒にとっても、「知識・技能」を中心とするペーパーテスト・客観テストのみを課されるとなると、探究型の授業自体を否定することにもなりかねません。

このように多様な評価方法を実施する前提として、評価方法のプリムティブ（単純かつ根源的）な方法として「**観察と対話**」があることを忘れてはいけません。つまり、子どもたちの姿を通じて教育実践を生き生きと語る「見る目」「聴く耳」「語る口」を鍛えてほしいと思います。（最近では、この「観察と対話」の方法として「みとる」という言葉が使われていますね）。

その上で、公的文書におきましても、「思考・判断・表現」の観点を形成する指導場面では、「多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価」（「報告」2019年1月21日）や「ポートフォリオを活用したりするなどの評価方法」（『ハンドブック』2019年）が推奨されていますので、ぜひ取り組んでいただきたいと思っております。その際に少しアドバイスしたいと思います。

図4 『カリキュラム適合性』



出典：西岡加名恵編：『「活用する力」を育てる授業と評価』学事出版、2009年、p.9

まず、「ポートフォリオ評価法」ですが、最近では多くの教育現場で取り込まれているように思います。佛教大学でも、学生にポートフォリオを作成するように見事に指導される先生が多くおられます。その際に、「ポートフォリオ評価法」の特質として、単にファイルに資料などを蓄積するだけに終わるのではなく、定期的に、子どもたちのポートフォリオを前にして、子どもたちの自己評価を促す「カンファレンス」を実施してほしいと思います。自己評価を促すと言いましても、小学校低学年と高学年の子どもたちでは、その様相は大きく異なりますね。表5は、鳴門教育大学学校教育学部附属小学校で仮説的に提起されている学年段階に応じた発達表です。参考にいただければと思います。

もうひとつ、日本の「素朴概念」概念研究を牽引されてきた堀哲夫先生が提案されている「一枚ポートフォリオ <OPPA>」を紹介します。OPPAとは、教師のねらいとする授業の成果を、学習者が一枚の用紙（OPPシート：One Page Portfolio Paper）の中に授業前・中・後の学習履歴として記録し、その全体を学習者自身に「自己評価」させる方法を言います。通常のポートフォリオ評価と違って、一枚の用紙のみを用いるので、評価のために必要最小限の情報を最大限に活用することを眼目としています。